

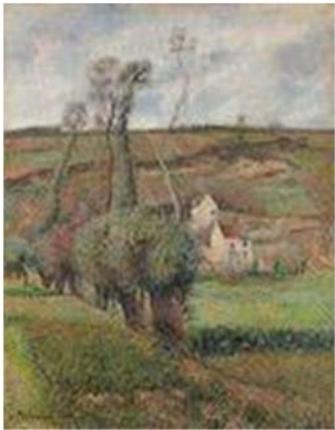
名画を楽しむ

美術館の西洋絵画10作品とそれを描いた画家について解説します。

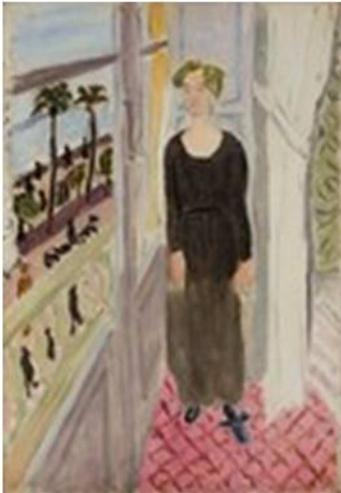
作品解説は、描かれた背景や画家の生涯を想像するのに役立ててください。

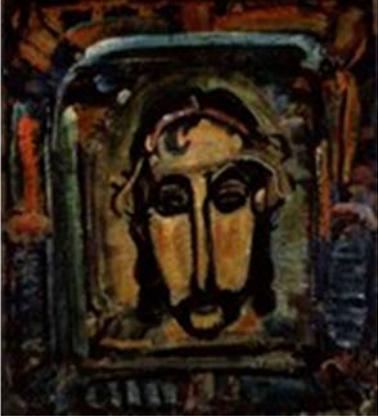
絵の鑑賞は、人それぞれです。自分の感性に従い、自分の好きな画家や気に入った作品を見つけてください。

※子どもと鑑賞する際は、「名画を楽しむ～子どもと絵を見よう～」の声掛けを参考にしてください。

	作家(生没) 作品名(制作年)・サイズ	作品解説	作家解説
1	<p>カミーユ・ピサロ (1830～1903) ポントワーズのレザールの丘(1882) 80.0×65.0cm</p> 	<p>ピサロは、自然を求めてポントワーズに移り住み、ここで最も実り多い作品を制作しました。画面は、平地、小高い丘、空と3分割され、木立に沿って左へと導かれ、中景には煙の立つ民家が見えます。農村の一コマが入念な筆触分割で描かれています。大地の画家と呼ばれるピサロらしい作品です。</p>	<p>カリブ海のセント=トーマス島に生まれ少年時代を過ごしました。1855年、パリに出て風景画を描き始めました。1859年、「落選画展」に初出品し、マネと印象派運動の推進力となり、1874年、印象派第2回展に参加しました。ピサロは印象派の作家たちのなかでも一番の年長で、人柄も温厚だったこともあり、若い作家たちの先頭に立ち、印象派展のすべてに出品し続けました。印象派運動の理論派であり、リーダー的存在でもありました。</p>
2	<p>アルフレッド・シスレー (1839～1899) サン・マメスのロワン河畔の風景 (1881)・34.2×48.5cm</p> 	<p>サン・マメスは、1880年代に多く描いた場所です。空は横向きの大ぶりの筆触を丁寧に重ね、色彩は、印象派の色彩分割の手法を忠実に守ったおだやかな作品となっています。そよぐ風や川のせせらぎ、草花のにおいまでも感じられる自然の風景と、そこに暮らす人間との調和が感じられる作品です。</p>	<p>貿易業を営む裕福なイギリス人両親のもと、パリに生まれました。家業には興味を示さず、美術館めぐりに関心をもち、1862年に両親から画家になることを許され、モネやルノアールらとも親交を深めました。1874年、印象派第1回展に出品し、典型的な印象派の画家として活動しました。1880年、セーヌ川の支流のひとつ、ロワン川沿いに活動の拠点を移し、そこで、空の広がりを大切にした風景画を描き、詩情豊かな親しみやすい作品を残しました。</p>

	作家(生没) 作品名(制作年)・サイズ	作品解説	作家解説
3	ポール・セザンヌ(1839～1906) 北フランスの風景 (1885-87 頃)・45.0×53.0cm 	セザンヌの代名詞ともいえる塗り残しがみられます。樹木と石塀、その奥に広がる草原の空間さえ捉えられれば、画家の意図は達成されたのでしょうか。未完成という印象派の本質的な特徴から、枝葉末節は切り捨てるといふ抽象絵画の萌芽までを見出すことが可能な作品といえます。	南フランスで銀行家の息子として生まれました。1861年にパリに出て、ピサロと出会い、印象派の理念を学んでいきました。1874年、印象派第1回展に出品しましたが、やがて印象派から離れ独自の絵画様式を探求していきます。1880年頃から南フランスの故郷エクスにこもり、澄みきった色彩で建築的な構図、堅牢な形態が特徴の人物や静物、山などを描くようになります。この造形思考は、キュビズム以降のピカソやマチスら、近代絵画の展開に大きな影響を与えました。
4	クロード・モネ(1840～1926) 睡蓮(1897-98 頃)・89.0×130.0cm 	モネは同一のモチーフを異なった時間の光と空気のもとで、複数制作してきました。自宅の人工池で栽培した睡蓮は、素描も含め250点もの連作が描かれました。本作は、その最初に手がけられた8点連作の1つです。愛好していた日本の浮世絵のクローズアップ手法が用いられています。	パリの下町の食料品屋の息子として生まれました。1856年、ブーダンから画家になることを勧められました。その後、ピサロと親交を結び、ルノアールやシスレーらとも出会い、戸外の光のなかでの制作を始めました。1874年、印象派第1回展に出品した《印象・日の出》から印象派の名前が生まれました。空や雲の動き、水に映る木の葉の微妙な光や影などの変化まで描きとめました。後半生は、積糞や睡蓮の連作を多く手がけました。
5	オディロン・ルドン(1840～1916) オフィーリア(1901～09 頃) 70.0×52.8cm 	シェークスピアの『ハムレット』のヒロイン、オフィーリアを描いています。横顔女性像を多く描いたルドンの本作は、内面に向かっているように閉じられた目と豊かな色彩により、生と死の問題を描き分けています。オフィーリアを取り囲む褐色は死の領域のようであり、内側の彩りは、はかなくもみえます。	フランスのボルドーに生まれました。1872年からパリに住みました。印象派には批判的で、色彩を避けて白と黒による幻想的な石版画集を作り続けました。代表作に『聖ヨハネ黙示録』(当館所蔵)などがあります。象徴主義の詩人や文学者と親交を持ち、自己の作品世界を形成していきました。1899年から油彩とパステルを使った明るい色彩による画境に入り、晩年は、人物や花を神秘的に描きました。

	作家(生没) 作品名(制作年)・サイズ	作品解説	作家解説
6	<p>ピエール=オーギュスト・ルノアール (1841～1919) バラ色の服を着たコロナ・ロマノの肖像 (1912 頃)・41.0×33.5cm</p> 	<p>モデルのコロナ・ロマノはルノアールが好んで描いたコメディ=フランセーズの舞台女優で、ルノアールの長男ピエールの友達です。パリの華やかな社交生活が繰り広げられる劇場の主題に魅せられていたルノアールは、1870年代に活躍した女優の姿を現代の女神的存在として、好んで描きました。</p>	<p>フランス中部のリモージュに生まれました。最初は陶器の絵付師として働き、1862年、国立美術学校に入学し、グレールの画塾で、モネ、シスレーらと出会いました。印象派展に第1回から出品し、1876年の第3回展で《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》を出品しましたが、酷評を受けました。1888年頃から真珠色の時代に入り、裸婦や肖像を主に描き、ふくらみのある温かい絵肌で独自の画境を開きました。晩年は持病のリウマチに苦しみながらも、最後まで絵筆を握り続けました。</p>
7	<p>ワシリー・カンディンスキー (1866～1944) 二つの黒(1941)・116.0×81.0cm</p> 	<p>2つの黒が形作る不安定な対角線構図の上で、上下が分からない階段などの反転図形が錯覚を呼び、音楽記号やネックレス、パレットを思わせるものなどが浮遊しています。現実とは異なるもうひとつの具体的な世界がここに存在しているようにみえます。</p>	<p>モスクワに生まれ、モスクワ大学で法学と国民経済学を学びました。1896年、モネの《積みわら》に衝撃を受け、ミュンヘンの画塾で絵画に専念しました。1910年、《コンポジション》シリーズを手がけ始め、表現主義的な画風から抽象絵画へと移行していきました。1922年、ドイツ・バウハウスで教鞭を執り、ドイツ国籍を取得しましたが、1933年、パリに亡命しました。絵画に音楽性を表現することを目指し、「抽象絵画の父」と呼ばれ、20世紀美術史に大きな足跡を残しました。</p>
8	<p>アンリ・マチス(1869～1954) 窓辺の婦人(1919)・66.5×46.0cm</p> 	<p>マチスは「黒というのは力です。私は構成を単純化するために黒で重心をとるのです」と語っています。女性の左側に、外の風景が描かれています。そこには、ニースの海岸線が見え、道行く馬車や人が黒いシルエットで表され、婦人の服の色とともに、黒が画面全体を引き締める重要な色となっています。</p>	<p>北フランスのカトー・カンブレジに生まれました。1892年、画家を目指しパリの国立美術学校で学びました。1905年、サロン・ドートンヌにドラク、ヴラマンクらと同室に展示され、「フォーヴ(野獣)」と呼ばれました。1908年以降、フォーヴの流行が過ぎると、単純化され平坦な色面構成と的確な描線で描くようになるようになりました。1916年から冬をニース、夏をパリで過ごすようになり、安楽椅子に腰かけてながめられるような絵画を理想としていました。また、彫刻、版画、グラフィックの仕事も手がけました。</p>

	作家(生没) 作品名(制作年)・サイズ	作品解説	作家解説
9	ジョルジュ・ルオー (1871～1958) 聖顔 (1939) ・ 61.0×54.5cm 	茨の冠を付け十字架を背負うキリストがゴルゴダの丘に向かう途中、ヴェロニカという女性がヴェールでその顔を拭ったところ、キリストの顔が生き写しになったという聖顔布伝説に基づいた作品です。重厚で激しい筆使いにより、キリストの苦悩や慈愛が表現され、画家の深い精神性が込められています。	パリに生まれ、最初はステンドグラス職人の徒弟として働きました。1892年、国立美術学校でギュスターブ・モローに学び、1903年、モロー美術館の初代館長となりました。このころから古典的画風を離れ、娼婦や道化師、裁判官などを青を基調とした荒々しい筆致で描きました。1905年、サロン・ドートンヌにマチスらと出品し、フォーブの一員とみなされました。激しい画風は、やがて敬虔なキリスト教信者としての聖なる雰囲気を持ち、宗教的テーマや聖書の風景などを多く制作するようになりました。
10	アンドレ・ボーシャン (1873～1958) 森に棲む動物達 (1930頃) 83.5×100.5cm 	ボーシャンは、庭師の肩書が付いて呼ばれます。素朴派の画家たちは、他に定職を持ち、日曜画家であったことを示しています。日差しの方向が定まっていない陰影や、まるで浮かんでいるように描かれている岩盤ですが、彼らの作品からは、我流で技法を開拓し、創作する喜びが満ち溢れています。	フランスのシャトールノーに生まれ、庭師である父と同じ園芸の道に入りました。1894年、軍務に就き、翌年、苗木栽培業を始めました。1917年、測量兵士としてフランス戦線に従軍し、その合間に油彩画を描きました。復員後、朝は絵を描き、昼には畑仕事に精を出しました。1921年、サロン・ドートンヌに出品した作品が注目を集めました。絵画の専門教育を受けず、アンリ・ルソーに通じる素朴な画風と誠実な仕事ぶりが共感を呼び、フランス素朴派の代表的な画家となりました。